

●南アジア

学生寮に国際社会を見る

脇村孝平（わきむら こうへい）

大阪市立大学大学院経済学研究科・教授

地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五四年、兵庫県
- ② 専門分野・地域……社会経済史・南アジア（具体的にはインド）
- ③ 学歴……大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程
- ④ 職歴……現在の所属先のみ（三六歳、現在まで二年間）
- ⑤ 現地滞在経験……インド（三二歳、二年間、留学生）、イギリス（四三歳、一年間、客員研究員）
- ⑥ 研究方法……文献史的な研究方法を取っているのので、上記のインドおよびイギリスに滞在中も、公文書館なしは図書館に日参することが常だった。
- ⑦ 所属学会……日本南アジア学会、社会経済史学会、アジア政経学会
- ⑧ 研究上の画期……一九九〇年代以降のインドの経済的台

頭、そしてグローバル化状況への適応。これによって、私のインド史認識が大きく変わった。その後、「開放体系としてのインド亜大陸」というような見方をするようになった。

⑨ 推薦図書……萩原延壽『遠い崖——アーネスト・サトウ日記抄』（全一四巻、朝日文庫、二〇〇七～〇八年）。アーネスト・サトウというイギリスの一外交官が幕末維新期の日本を「地域研究」した記録。

メッセージ

（地域）研究者になること

私の専門は経済学だが、学部時代は開発経済学に関心があつた。大学院に進学してから経済史を専攻することを選択し、「低開発」の根拠的理由を歴史のなかに探ろうと考



えた。事例研究としてインドを対象地域に選び、一九世紀後半に頻発した飢饉の研究を開始した。これが私にとっての「地域研究」事始めだった。しかし、自らの研究を「地域研究」として意識するようになったのは、一九八〇年代後半の二年間のインド留学という契機であった。留学中、飢饉の研究のためにニューデリーの国立公文書館に通いつめた。さて、現在の私の研究テーマは英領期インドの疾病史・公衆衛生史ということになる。当初の「飢饉」研究から、次第に「疫病」研究に移行了した結果である。また、研究のスタイルも少し変化した。狭い意味では、必ずしも「地域研究」的ではなくってきたからである。

第一部「現場の悩み三〇問」を読んで

先に「狭い意味では、必ずしも『地域研究』的ではなくなってきた」と書いたが、以下に敷衍する。一九九〇年代中頃から医学社会史的な領域に関心を持つようになり、同じ志の東アジア（日本、台湾、韓国）の研究者との間に研究者ネットワークを形成するようになった。その結果、東アジア史との比較のなかで南アジア史を考えるようになった。その後、二〇〇〇年代初頭から、いわゆる「グローバル・ヒストリー」という国際的な研究潮流に関心を持つようになった。当初この研究潮流では、中国史が問題関心の中心にあったが、次第に南アジア史も視野の中に入るよう

になり、私自身も南アジア史をグローバルな連関のなかで考えるようになっていった。かかるアプローチもまた、「地域研究」の一類型に加えていただければと思う。

地域研究の魅力と可能性

「地域研究」とは何か。私は次のように考える。「外部の人間 (exotic) が、ある社会をできる限り内在的に理解する試みではないか」と。これは、一昔前の文化人類学の自己規定に近いかもしれない。かかる認識に基づきついうと、私の「地域研究」の原点は、一九八〇年代後半のインド留学における生活経験ということになる。生活経験とはいつでもデリー大学の学生寮で暮らしたに過ぎないが、インド人学生との交遊、そして学生寮における人間模様の見聞が、私のインド社会像の基礎を形作った。とりわけ、「学生寮という社会がひとつの国際社会であった」という記憶が私の中に深く刻み込まれた。インドのさまざまな地域からやってきた母語を異にする学生たちが、あたかも国際社会のようにしてひとつの世界を形成していたからである。先に、研究上の画期として「一九九〇年代以降のインドの経済的台頭、そしてグローバル化状況への適応」ということをあげたが、グローバル化した世界に対応できる文化的遺伝子（ミーム）がインド社会に深く埋め込まれていることは、この寮生活のなかですでに体験していたのである。